

## 「あなたがたのうちふたりが」

2005.4.10 赤羽聖書教会主日礼拝説教

15. また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。

もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。

16. もし聞き入れないなら、ほかにひとりかふたりをいっしょに連れて行きなさい。

ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。

17. それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。

教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。

18. まことに、あなたがたに告げます。

何でもあなたがたが地上でつなくなら、それは天においてもつながれており、

あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれています。

19. まことに、あなたがたにもう一度、告げます。

もし、あなたがたのうちふたりが、

どんな事でも、地上で心一つにして祈るなら、

天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。

20. ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

## 説教

一緒に集まって祈る、ということは、私たちキリスト教会の最も基本的なスタイルであろうと思われます。初代教会は、聖霊降臨以前から「百二十名ほどの兄弟たちが集まって」、「みな心を合わせ、祈りに専念して」いました（使徒 1:14,15）。聖霊降臨後には、これに加えられた三千人ほどの弟子たちが「毎日、心一つにして宮に集まり」、「祈りをしていた」のでした（使徒 2:42）。使徒ペテロとヨハネが迫害のため拘束され釈放された時、彼らの報告を聞いた信者たちは「みな、心一つにして、神に向かい、声を上げて」祈りました（使徒 4:24）。使徒ヤコブが殉教し、ペテロも投獄されて処刑される日の前日には、「教会は、彼のために、神に熱心に祈り続けて」おりました（使徒 12:5）。アンテオケ教会がパウロとバルナバを最初の宣教師として派遣する時、教会は、断食の祈りをもって按手し、二人を派遣しました（使徒 13:3）。迫害のため投獄されたパウロとシラスは、獄中で、真夜中、共に「神に祈りつつ讃美の歌を歌って」いました（使徒 16:25）。

このように、聖書が記録する初代教会の祈りは、そのほとんどが同じ教会の誰かと共に祈る祈りです。個人的に、ひとりだけで祈る祈りは、ほとんど記録されておらず、（勿論、初代教会の信徒たちが個人的に祈らなかったということではなく、個人的にも大いに祈ったと思いますが、しかし、それでも）むしろ、他の兄弟姉妹の誰かと「共に祈る」祈りがひたすら記述されているということは、注目に値すると思います。つまり、使徒行伝を見ると、初代教会は「御霊の大洪水」と呼ばれるほどの実に爆発的な宣教の働きを推進していくのですが、その背後には「共に祈る」祈りがある、その爆発的な宣教のパワーの源が「共に祈る」祈りにあったのだということ、あたかも聖書記者ルカが解説しているかのようです。そして、事実、その通りです。ルカが書き記している通りであります。すなわち、「共に祈る」祈りこそは、初代教会の信者を力強く奮い立たせた力でした。初代教会の宣教パワーの秘訣でした。「共に祈る」祈りによって、初代教会は、迫害を恐れることなく、大胆に、力強く、復活の主を証ししていったのです。このことは初代

教会に限りません。いわゆる<sup>リヴァイヴァル</sup>信仰復興の歴史を見る時、大きな悔い改めと爆発的な福音宣教の働きがなされる背景には、きまって「共に祈る」祈りがありました。わずか二人だけの早天祈禱会から、あるいは有志たちによる小さな聖書研究会、祈禱会で「共に祈る」祈りから、信仰復興の大きな運動が起こっていったのは、歴史の事実です。

例えば、18世紀にドイツで起こった敬虔主義運動は、ルター派の牧師フィリップ・シュペナー（Phillip Jacob Spener）が、形骸化したドイツ・ルター派の国教会の内部で、本当に中身のある信仰、敬虔な信仰を求め、互いの信仰を高め合うことを求める有志たちと共にあった、小さなグループによる聖書研究会、祈禱会が運動の原動力となりました。1850年代にアメリカで起こったリバイバル運動は、ニューヨーク・フルトン街で、毎日メソジスト教会の一室に集まって商人たちが「共に祈った」正午の祈禱会が引き金になりました。これがアメリカ全域に波及しました。そして、そのリバイバルで救われた人たちが宣教師になって、明治の日本へたくさんやって来たのです。ヘボンやフルベッキといった初期の宣教師がそこでチャレンジを受けて、日本にまでやって来たのです。

さらに、この日本に来た宣教師たちは、年の初めに初週祈禱会というものを開きました。そして、これは素晴らしいと感激したバラ塾門下生の日本人たちが、習慣を真似て初週祈禱会を行いました。この日本人による初週祈禱会は何週間にも及び、これがきっかけとなって、遂には日本で初めてのプロテスタント教会である「横浜海岸教会」が誕生するようになったのです。つまり、日本宣教を志す志は、アメリカ人信徒らの「共に祈る」祈りから生み出され、さらに、日本のプロテスタント教会は、そこから刺激を受けた日本人信徒らによる「共に祈る」祈りからこれまた生み出されたのでした。この波は京阪神にまで拡大し、京都の同志社では二百名の学生が信仰告白したそうです。このように、「共に祈る」祈りが信仰復興の原動力となり、福音宣教の原動力となっていったというのは、歴史の示す事実です。

また、隣の韓国では、日本が韓国を併合する直前に「大復興」と呼ばれる、極めて大きな規模の悔い改めと宣教運動がなされますが、そのきっかけとなったのは、吉善宙という牧師が、その教会のひとりの長老とわずか二人で始めた早天祈禱会であったと言われます。日本による神社参拝強制に対して、何人もの牧師たちが抵抗し、投獄され、殉教し、それが戦後の韓国教会復興の大きな原動力となっていきますが、その神社参拝抵抗運動の契機となったのは、1939年8月末、釜山水泳海水浴場で十余名の同志たちが集まって「共に祈った」祈り会にあったと言われます。彼らはその後もしばしば全国から集まっては「共に祈り」ました。投獄され、釈放されると、彼らは集まって「共に祈り」ました。勿論、彼らが投獄されている間は、教会の信徒たちも、毎朝五時に集まっては、牧師たちが迫害に打ち勝ち、立派にイエスさまを証しして殉教するよう、牧師のために祈りました。昼間も、牧師の家に集まっては、教会のため、牧師のため、牧師の家庭のため、そしてお互いのため、祖国のために「共に祈り」ました。牧師が獄中で死にそうになり、危篤状態に陥った時には、夜を徹して「共に祈り」ました。これが韓国教会を支えたのです。つまり、「共に祈る」祈りが韓国教会の戦いを支えたのです。

それで、今日まで、韓国では、早天祈禱会をやらない教会は（私の知る限りでは）存在せず、どの教会も例外なく早天祈禱会を行うことが一つの伝統となっているようです。早天祈禱会以外にも、金曜夜は、半徹祈禱会、週に一度行われる区域ごとの祈禱会などが行われていて、韓国教会は「集まっては祈り、立って伝道する」、それが韓国教会だ、とよく言われる所となっております。このように、「共に祈る」祈りこそは、韓国教会の原動力です。韓国教会発展の原動力でした。「共に祈る」祈りによって、韓国教会は前進してきたと言って過言ではありません。（時々それを悪用して、今回のような悪い事件も起こりますが、～朱基徹牧師の時代にも同様の事件が起きて朱牧師は戒規した～）とにかく、韓国教会は「共に祈って」前進して来たのでした。

さて、今日のみことばは、イエスさまが戒規ということの具体的な手続きを教えて下さっている箇所です。それは同時に、教会とは何であるか、その本質を説いておられるみことばでもあります。これによると、教会とは、集まる人数の多さではなく、たとえ「二

人でも、三人でも、わたしの名において集まる所」、そこに主ご自身も共におられ、それが教会であると説かれます。この場合、ただ人が集まればそれが教会というわけではないことは言うまでもありません。「わたしの名に於いて集まる」の直訳は、「わたしの名の中で集まる」です。「わたしもその中にいる」の直訳は、「そこに、彼らの真ん中にいる」です。つまり、ここでイエスさまが言われる「二人でも、三人でも、わたしの名の中で集まる集まり」とは、イエスさま中心の交わりです。人が中心ではなく、イエスさまが中心の交わり、それが教会です。そこでは健全なみことばが説かれています。

すなわち、「もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。」という、罪人に悔い改めを促す、健全な神のことばが正しく語られている、それが教会です。教会とは、聖人君主の集まりではありません。罪を犯さない、完璧な人間、完璧な善人たちが、一糸乱れず、聖なる行いだけをひたすら行い続ける所ではありません。教会は、罪人の集まりです。教会には罪人しかいません。イエスさまだけは聖人ですが、それ以外の人間はみな罪人です。牧師も含めてみな罪人です。罪人じゃない人間は一人もいません。だから、誰しものが、黙ってそのまま放っておいたら、罪を犯すのです。それで、人ではなく、神のことばがいのちです。罪人を教える神のことばが教会のいのちです。すなわち、罪人にへつらうことなく、罪の悔い改めを促す、健全な神のことばが正しく語られることこそ、教会のいのちなのです。これが「主の名に於いて集まる所」、キリストのからだなる教会です。そこではみことばが正しく語られます。みことばに従うよう悔い改めが促されます。そうして、みことばの支配がなされる、それが教会なのです。

ですから、みことばに従わず、神さまに背いて、罪を犯す兄弟姉妹がいるならば、イエスさまは、まずは「二人だけのところで責めるよう」命じます。

**15 . また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。**

**もし聞き入れたら、あなたは兄弟を得たのです。**

それでも聞かぬ場合は、「他にひとりがふたりを一緒に連れて」譴責するよう命じます。

**16 . もし聞き入れないなら、ほかにひとりがふたりをいっしょに連れて行きなさい。**

**ふたりか三人の証人の口によって、すべての事実が確認されるためです。**

それでもなお聞き入れようとしなければ「教会に告げ」、教会の言うことさえ聞かぬようなら「異邦人が取税人のように扱う」、すなわち除名して、いつか死ぬ日までには罪を悔い改めて、終わりの日には地獄に堕ちないように、最後の悔い改めを促せと命じます。

**17 . それでもなお、言うことを聞き入れようとしないなら、教会に告げなさい。**

**教会の言うことさえも聞こうとしないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。**

**18 . まことに、あなたがたに告げます。**

**何でもあなたがたが地上でつなぐなら、それは天においてもつながれており、**

**あなたがたが地上で解くなら、それは天においても解かれているのです。**

こうして、最後は教会の戒規をもって神のことばの支配を貫く、それがキリストのからだなる教会です。

ここで注目すべきことは、最初は、二人だけのところで、それから、二人、三人のところで、そして、教会に、という順序で、次々に神のことばが語られて、そういう風に神のことばの支配が貫かれていくという点です。二人だけの所で、そして、三人だけの所で、さらには、教会に於いて、そこに主がおられる、と言うのです。「主の名に於いて」正しくみことばが語られ、「主の名に於いて」

共に祈る、その所に、「その中心に（直訳）」主イエスさまもおられる、と言うのです。すなわち、最終的には、教会の戒規によって、罪を犯している者に罪の悔い改めが宣教されて神のこぼりが貫かれていくのですが、でも、それはあくまで最終的な手段であって、教会の戒規に至るまでは、「二人による集まり」があり、「三人による集まり」があり、それでもダメな場合には、すなわち小さな単位の集まりで、その罪を食い止めることができなかつた場合には、教会が出てきます。つまり、教会の牧師・伝道師が登場する前に、その人に戒規を執行する前に、「二人、三人、あるいはそれ以上の複数人による」交わりに於いて罪を悔い改めることができればそれがベストだと言うのです。ここに「共に祈る」祈りの重要性があります。私たちが、たとえ二人でも、三人でも、「共に祈る」その所に、私たちの主イエスさまも共におられます。イエスさまは、「共に祈る」私たちと共におられ、「共に祈る」私たちに恵みで満たし、「共に祈る」私たちの祈りを聞いて、「共に祈る」私たちに祝福して、「共に祈る」私たちに正しく導いてくださるのです。

私たちは、自分ひとりなら、祈らなくなります。祈ることを学ぶこともできません。祈りの声もだんだん小さくなります。祈る気も無くなります。私たちは、弱い者です。罪深い者です。すぐに悪魔に負けてしまいます。放っておいたら、罪を犯してしまいます。すぐに自分中心になって、自分勝手に行動するようになってしまふんです。そうして、悪魔の誘惑に負けて罪を犯し、神さまに背いて、神さまのさばきを受けるようになってしまいます。罪を犯しても、誰も注意してくれません。だから、「共に祈る」ことが必要です。自分ひとりでなく、「共に祈る」生活をしなければなりません。まず、週に一度、こうして教会に来て、礼拝に於いて共に祈りましょう。それから、水曜祈禱会に来て、共に祈りましょう。近所の方は、早天祈禱会に来て、共に祈りましょう。家でも、家庭礼拝をしましょう。夫婦で祈りましょう。親子で祈りましょう。職場でも祈りましょう。友だち同士でも、祈りましょう。私たちが共に祈る時、そこから新しい神さまのみわざが始まります。神さまの栄光を見ます。聖霊に満たされます。心が清められます。罪の悔い改めと、生まれ変わった新しい生き方が始まるのです。霊的な刷新がなされます。慰められます。励まされます。力が湧きます。奮い立ちます。

「二人だけのところで」「あなたがたのうちふたりが...祈るなら」「二人でも三人でも」二人、三人が主の名によって集う所、そここそ御国の最前線です。小教会です。教会の出張所です。

ここに集うみなさんが、教会で、家庭で、職場で、地域で、「共に祈って」、神と人々に仕え、世の光、地の塩となって神の栄光をあらわされるよう祈ります。